4月17日　マルコによる福音書16章1～8節　今日の説教から
説教題：「十字架の先にある道」

みなさま、イースターおめでとうございます！

新しい年度が始まり、教会の庭の桜も満開の中、今日は私たちにとって最も大切な主日礼拝の一つである「イースター記念礼拝」を守っています。今日の個所はイエス様が復活したことを婦人たちが知る個所なのですが、その記述は8節で途切れるように終わっています。9節からは「結び」という形で復活したイエス様の姿と、弟子たちに対する言葉、そして天に上る様子が記されていますが、これは最も古い写本には記されていない箇所であり、「初代教会以降の人々が書き加えたものであろう」とされています。

今日の個所の並行個所では、例えばヨハネ福音書では別の書き方がされています。ヨハネによる福音書20章では、墓を見に行ったマグダラのマリアは空の墓を見て「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません」と弟子たちに訴えますが、復活のことは一切頭の中にありません。その言葉を聞いてペテロとヨハネが墓に駆け付けて、「墓が空である」ことを信じますが、「イエス様が復活した」という発想には弟子たちも至りませんでした。そのように、出来事自体は同じなのですが、登場する人物が全く異なっています。ただ共通することとして、イエス様がいなくなった後の空の墓は、マルコ福音書において婦人たちを震え上がらせるほどの恐ろしさを持っていました。そして空の墓自体は、ヨハネ福音書においても弟子たちを復活の信仰へと導くものではありませんでした。

今日の個所に示されているのは、「これが福音である」という執筆者マルコの意思と、その延長線上にある私たちの人生そのものなのではないでしょうか。著者マルコにとって、イエス様が復活して人々の前に現れたことや、復活の後に天へと帰ったことは、さほど重要ではなかったのかもしれません。それよりもむしろ、「イエス様は復活した」という事実ただ一つが何にも勝る福音であると強調しているのではないでしょうか。そして、私たちの信仰の道の向かう先は暗い墓穴などではなく、十字架の先に備えられている「神様への道」なのです。

私たちも、イエス様に出会うことによって、イエス様が示してくれたこの「復活」というものが自分の身に起きるものとして理解することが出来るようになります。私たちに訪れる死は、すべてを終わらせるものでは決してなく、次の命へとつながるきっかけに過ぎません。この世で生きる人々とはしばらくの間お別れをすることになりますが、天の国において、そして復活の後にはまた喜びのなかで再会をすることが出来ます。私たちの命が滅びに向かって行くものではないことを、イエス様はその身をもって教えてくれているのです。それを、「自分の身に起きること」として自覚を持った時、私たちは神様の愛と、イエス様の愛の大きさをはっきりと理解することができることでしょう。

イエス様の復活に込められた神様の愛に感謝をしながら、今日のイースターという一日を、これからの歩みを共に進めていきましょう。

今日の説教箇所：マルコによる福音書16章1～8節

- 1:安息日が終わると、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメは、イエスに油を塗りに行くために香料を買った。そして、週の初めの日の朝ごく早く、日が出るとすぐ墓に行った。彼女たちは、「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」と話し合っていた。ところが、目を上げて見ると、石は既にわきへ転がしてあった。石は非常に大きかったのである。墓の中に入ると、白い長い衣を着た若者が右手に座っているのが見えたので、婦人たちはひどく驚いた。若者は言った。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と。」婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。